



## Watanabe Kazan: An Artist and Political Hero

Assistant Professor and Art Department Chair, USA, Georgetown College Jean M. Ippolito



### KAZAN AS AN ARTIST

Watanabe Kazan was both an artist and a politician. As an artist, he painted in a variety of styles but is most well known for the realism in his portraiture. As a civil administrator, Kazan continues to be held in high regard because of his wise decisions and pioneering spirit.

As an artist, Kazan is usually associated with the Nanga or literati school of painters, which is appropriate not for his painting style but for his position as a scholar and official.

### KAZAN AS A POLITICIAN

Watanabe Kazan lived in an exciting time in Japanese history. The Edo period was one of peace and prosperity for the people of Japan. Along with prosperity came leisure, entertainment and the arts which flourished during Kazan's time.

One of the reasons for peace was the rigidity with which the Tokugawa government controlled all aspects of society by regulating social codes according to the class structure.

As a civil administrator for the Tahara fief in Aichi province, Kazan gained more and more responsibility. As a representative of Tahara, he traveled with the province's entourage to Edo each year. In Edo, Kazan had the opportunity to come into contact with the proponents of rangaku as well as other members of the literati circles.

Kazan was appointed chief retainer of the Tahara fief in 1832. As chief retainer, Kazan's responsibilities included formulating policies concerning the defense of Tahara's coastline and relief of famines affecting the region. As a preventative measure, Kazan had grain storage houses built to store grain enough for the entire town. It was due to Kazan's foresight that the people of Tahara avoided extreme hardship during the famine of Tenpo.

### WHY IS KAZAN A HERO?

Watanabe Kazan was placed under house arrest at the fief of Tahara. While under house arrest, Kazan was not permitted to communicate with his friends in Edo or sell paintings to supplement his family's income. The economy produced hard times, however, and Kazan continued to paint. He predated his paintings to the time before his arrest in order to sell them. His painting Peony became a very controversial one because it was produced under these circumstances.

When Kazan's overlord was accused of allowing a prisoner to live extravagantly, Kazan made the decision to commit suicide in order to keep the blame for his misfortunes from falling on the shoulders of Tahara's good people. Kazan's last letter to his son before his death explains these intentions. Kazan took his own life in 1841. The Tokugawa government continued to decay until, in 1868, the Meiji Emperor took the throne and a new period of open door policy, international exchange and rapid modernization began.

Today, Tahara-cho in Aichi prefecture, is a city with a strong program of international exchange. The people of Tahara see Kazan as a regional and national hero for the modest, self-sacrificing role he played in ending Japan's long period of isolation and encouraging international study and exchange. Kazan continues to be honored for his contributions to politics, art, and culture, and plays an important role in Japan's modern history.



田原城桜門

## 渡辺華山 芸術的、政治的な英雄

アメリカジョージタウン大学助教授、芸術学部長 ジーン・イボリト

### 芸術家としての華山

渡辺華山は、芸術家でもあり、政治家でもありました。芸術家として、彼は様々なスタイルの絵画を描きましたが、肖像画における写実主義において最も知られています。また、政治家としては、賢明な決断力とパイオニア精神のため、今日でも人々から高く尊敬され続けています。

芸術家としての華山は、南画または文人画派の画家としばしば交流がありました。それらは、彼の画法のためではなく、むしろ学者と武士としての地位のために有効なものでした。

### 市民行政官としての華山

渡辺華山は、日本の歴史の激動の時代に生きた人です。その江戸時代は、日本人にとって平和と繁栄の時代でした。華山の時代に栄えた余暇、娯楽、芸術は、この繁栄と共にやってきました。士農工商制度の身分の区別により、すべての社会生活を支配していた徳川政治の厳格さが、この平和をもたらした一つの要因でした。

愛知県内での田原藩の家老として、渡辺華山はより多くの責任を得ていきました。田原の代表として、江戸に住んでいました。江戸では、蘭学の支持者だけでなく、他の文学者サークルの会員とも交際する機会を持つことができました。

華山は、1832年、田原藩の家老職に就きました。田原の海岸沿いの防御を考慮して制作を作り出すことや、食料不足に対する救援などが、藩の家老職としての華山の責任でした。華山は、予備測量を行い、町全体の人口に十分な食料を保存する倉庫を造りました。この華山の先見性のため、天保の大飢饉では、田原では一人の餓死者も浮浪者も出ませんでした。

### どうして華山は英雄なのか？

渡辺華山は、田原藩で蟄居生活を命じられました。この間、華山は自分の作品を売って、収入の一部とすることはしてはいけなくなっていました。しかし、家計が苦しいときには、絵を描き続け、それを売るために、逮捕以前の日付を作品に記しています。彼の作品、「牡丹図」は、このような環境の中で描かれたので、批判を受けました。

華山が蟄居生活の身でありながら、江戸の友人と交流をしているという批判により、華山は田原藩に迷惑がかかることを恐れ、自殺をする決意をしました。華山の死以前に書かれた、息子にあてた最後の手紙に、この自殺の意図が書かれています。華山は1841年、自ら命を絶ちました。明治天皇が即位し、鎖国を解除して新しい時代を切り開き、国際交流と急速な近代化が始まる1868年まで、徳川政権は衰退し続けました。

今日、愛知県田原町は、国際交流計画を強く進めています。田原の人々は、華山を、日本の長い鎖国時代を終わらせ、国際研究と国際交流を奨励した、慎み深く、自己献身的な、地域の、そして国家の英雄としています。  
(本文は、ジーン・イボリトさん訳)

P	P	P	P	P	P	P	P	P	P	P	題字「華山会報」華山会理事	目次
田原町博物館からのご案内	渡辺華山先生について 東部小学校児童 会員の一人言	華山史学研究会	各地の博物館を訪ねて 「東京国立博物館」	紀行文『游相日記』(3)	熊谷市・龍泉寺 (埼玉県熊谷市三ヶ尻)	華山が見た田原 (2)	華山史跡	田原町博物館所蔵品から 退役願書之稿 (1)	重文『四州真景図』	画家渡辺華山の心象	小澤耕一	

画家渡辺華山の心象

重要文化財 四州真景図

文政八年（一八二五）紙本淡彩

縦二二・〇〇一四・〇cm

個人蔵

四巻からなり、第一巻は江戸から潮来を経て犬吠崎までの旅の行程の覚書と略図七図を墨書で描き、着色はされていません。第二巻から第四巻までは各十図の合計三十図が淡彩を施されて収められています。作品のタイトルにもなっている「四州真景」の四州とは江戸から東に位置する武蔵・上総・下総・常陸で現在の千葉・茨城県を指します。華山がこの旅にでたのは、文政八年の六月二十九日で、第一巻はその前日の準備や訪ねた相手、送別会の記録から始まります。第二巻の巻頭に旅程の略図があり、ついで、中川御番所、行



釜原

徳、釜原（鎌ヶ谷）、利刀、滑川観音、河（神）崎明神、河崎明神山、香取、浮島、潮来海雲山（寺名）。第三巻は潮来花柳（花街）、潮来泉屋より望図、無題（鹿島根本禅寺）、鹿島、砂山、砂山砂吹きあぐる図、



徳行

松岸より銚子を見る図、常陸波崎より銚子を見る、新町大手 町奉行やしき、川口鵜の糞石。第四巻は霧ヶ浜より海鹿島を見る図、和田不動道より海を見る図、穴ヶ崎、無題、

長崎、無題、犬吠崎、浦中、黒生、黒生小湊からなっています。

この前年に父を亡くし、渡辺家の家督を継ぎ、この年の夏に自身の病のため、塩原に湯治に出かけています。同僚の勧めもあり心身の保養のため、香取、鹿島方面への旅をすることにし、その旅の途中の風景をスケッチしたものが本図巻です。華山蟄居中の天保十一年の日記『守困日歴』七月二十三日の条に「遊総図着色」とあり、本図を「遊総図」と呼んでいたことが指摘されています。この作品の前段階の一次的な稿がさらに存在するのか、また、全ての着色が年代を隔てた後からされたものか、さらには、当初から巻紙形式のものか、冊子型か、後世の改装により形状が変更されています。

昭和十七年に重要美術品に認定され、同二十八年には重要文化財に指定されている華山真景図の代表作です。

田原町博物館学芸員

鈴木利昌

# 退役願書之稿(一)

前回まで本会報に連載された『華山先生略伝補』(三宅友信著)とともに、華山の生涯を知る史料に、今回から連載する『退役願書之稿』があります。

華山の伝記である『全楽堂記伝』(松岡次郎著)によると、天保十年(一八三九)、国家老の内命を受けた華山は、病気を理由に、その職を辞そうとして、「退役願書」を提出したとありますが、退役そのものは、許可されませんでした。退役について、現在の研究では、その他の理由も考えられています。ここでは割愛します。

『退役願書之稿』は、華山自身の筆になるもので、退役願と同時に、自身の歩んできた道も記述されており、華山の自叙伝として、華山の半生を知ることができます。現在、重要文化財に指定されており、田原町が所有しています。

本稿では、補注を交え、『退役願書之稿』を口語で紹介していきます。わかりにくい口語訳につまみしては、「」内に、原文を記しました。また、原文でも味わっていただきたい部分につきま

しては、口語訳の後の「」内に、原文を記しました。

なお、項目立ては、原文にはなく、内容をわかりやすくするためにつけさせていただきました。句読点や改行も適宜行いました。

## 一 退役の理由

私が、役目をやめたいということについて、先日内密に申し上げたところ、私を思いとどまらせようとする大変ていねいな手紙が届きました。そこで、またよく考えましたけれど、近ごろ、やたらと怒りっぽくなり、日夜心がわくわくして落ち着きません。今日も、高野長英に相談したところ、「いずれにしても今のところは、気持ちを休めなければ、薬を飲んでも効果はありません。脈がぶよぶよとゆるんで、筋肉にしまりがありません。「脈もぶよぶよ」と浮緩にて線緯縹り無之」草木に例えるなら、水草のようなものです。」

と言われました。右は、このおりの状態で、長英に問い合わせただければ、よくわかると思います。

水沢藩士の子として生まれる。医術をシーボルト等に学んだ蘭医。



高野長英(椿椿山筆)

華山らとともに洋学研究を始め、『夢物語』を著す。その中で、幕府の打払令を批判した罪により、華山とともに罰せられる。(蛮社の獄)

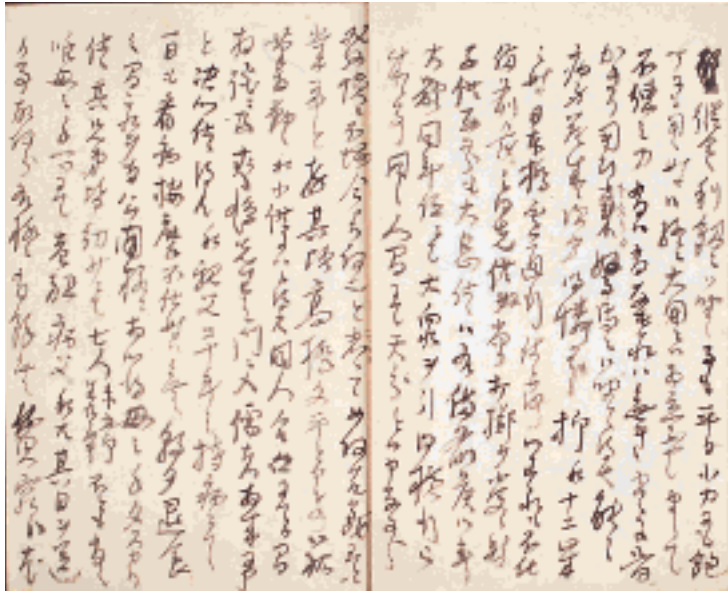
私が病気を理由に役目をやめたいと願い出ました事情を、深くお考えいただけるとよいので、ありのままに申し上げます。よろしくお聞き分けのほど、お願いいたします。

まず、役目をやめることをお願いした心のうちの是非を考えました。古人は、四十歳で仕え、七十歳で官職を辞したと言っているので、ご奉公の年数は三十年です。私の場合、八歳の時、御伽役を任せられ、今、四十六歳ですので、その間三十七、八年にも及んでいます。

寛政十二年（一八〇〇）、世子龜吉（十歳で逝去）の御伽役（幼君の遊び相手をする小姓）となる。

華山四十六歳は、天保九年（一八三八）のこと。

八歳から十五歳までは、毎日の「奉公」「日勤」でした。十六歳から三十二、三歳までは、隔日の「奉公」でしたが、日勤同様用事が多く忙しく働か



せていただきました。その間、和田倉門の番所に四年越で勤めました。そのうえ、三十七、八歳の頃、御用人を命じられて以来またまた忙しくなり、生まれてから四十六年間のうちで、五、六年しか人並みの勤めが出来ませんでした。右のとおり、ただ俸禄を無駄にして生きてきたようなものです。

文政二年（一八一九）、十二代藩主（戸田氏から数えて、以下同）康和が和田倉門の警固を命じられる。

文政十一年（一八二八）、華山は、側用人中小姓支配を命じられる。

近来、皆様が現在の職務におつきになられて以来、殿様に私のことをおっしゃられた方もご虚称下されたのでしょうか、家督を継いで四、五年後、お側近くに召し出され、だんだん並外れの憐れみ「格外之仁憐」を賜りましたことは、骨に銘じありがたきしあわせと存じます。まったく皆様のお陰と存じますが、右のご恩にお報いすることができないことは、今まで述べたとおり、勤めが忙しく無能に老いただけで「繁勤犬馬之齡相積」、皆様に励まされても「何程御鞭撻を受候而も」、練磨しない鈍剣のようであります。

文政七年（一八一四）父定通死去。華山家

督を継ぐ。

文政十年（一八二七）十三代藩主康明死去。華山らは、康明の異母弟友信を後継者に推すが容れられず、姫路藩から養嗣子を迎えられ、十四代藩主康直となる。翌年、華山は、側用人中小姓支配となる。家督を継いで四年目。

たとえ利剣であっても、ふだんから小刀として使ったり包丁として使ったりしていたのでは、最後には役にたたなくなるものです。ましてや練磨しない鈍剣、あればあったで、なければいままに力のかぎり使われてきた才能の鈍い私ですので、極度に病身になってしまいました。お憐れみ下さい。

華山の父 定通（渡辺華山筆）



## 二 立志

そもそも私が十二歳の時のことです。日本橋のあたりを通っていた時、忘れることのできないことが起こりました。備前侯の行列の従者に当たってしまい、棒などでうちたたかれてしまったのです。その時、子どもながらに、次のようなことをなげいたことを覚えています。

「備前侯は、年の頃からすれば、大体私と同じ位ではないか。それなのに大勢供を引き連れ、勝手気ままにふるまっているのは、同じ人間でありながら天から与えられた職分とはいいいながら、いきどおりを感じてしかたがない。今から何であろうとも志をたてれば、どんなことでもできないことはないであろう。」

『抑私十二歳之時、日本橋辺通行仕候節、わすれも不仕、備前侯之御先供に当り、打擲を受候時、子供ながらも大息仕候は、右備前侯、御年大休同年位にて、大衆を引、御横行被成候事、同じ人間にて天分とは申ながら、発憤に不堪、今より何也と志候はゞ、如何なる義にても出来可申と存』

華山十二歳は、文化元年（一八〇四）。通説では、華山が薬種商の多い日本橋あたりに、父定通の薬を買いに行った時のこととされている。

佐藤昌介氏は、当時の備前侯池田齊政は、華山より二十四歳上の三十六歳であるから、華山の記憶違いで、世子新之丞（齊輝）ではないかと推測する。



立志之像（田原町博物館蔵）

この場面を、田原町立田原中部小学校では、「華山劇・立志」として、毎年学芸会で上演している。華山劇について詳しいことは、前回の会報で、瓜生先生が書かれているので、そちらを参照のこと。

その頃、高橋文平という人が御祐筆を勤めていました。私は、子どもでしたが、高橋様とはよく話が合ったので、相談しました。そして爽鳩先生（せうこう）の門に入り、儒者になろうと決心しました。

田原藩儒三代爽鳩（鷹見星臯）のこと。爽鳩は、後に華山の師となる佐藤一斎に教えを受けたことがある。

けれども、私の父は、二十年來の病気で、一日とも看病や按摩をしてあげない日はなく、朝夕藩邸から家に帰って食事をする間、父の世話をこ奉公と同様に考えていたので、母の手も助かっていました。

研究会員 柴田雅芳  
（続）

## 田原町博物館 所蔵品から

重要文化財 渡辺華山筆孔子像  
天保九年（一八三八）絹本着色  
縦一四五・〇cm 横八二・〇cm



款記に「天保戊戌五月念三日、後学三宅友信薰沐拜写」とあり、その下に白文方形印の「友信之印」があります。友信は第十一代田原藩主三宅康友の子で、兄の第十二代藩主康和・第十三代藩主康明が相次いで亡くなり、本来の三宅家の血統を継ぐべき位置にありましたが、田原藩は

姫路藩から養子を迎えました。この作品は、時には藩主、全藩士の礼拝の対象になるため、華山は家臣である自分の名を入れずに、三宅家直系の血筋でありながら、藩主にならず、江戸巢鴨の下屋敷に隠棲していた当時三十三歳の三宅友信の名で制作しました。落款の書体は華山の筆跡で

す。

また、この作品は中国唐代の呉道元の筆と伝えられる孔子像を基にしたものと思われます。この孔子の聖像と十人の孔子門下の十哲像とともに田原藩校成章館春秋二回の積奠の際に掲げられ、明治時代以後、田原城本丸跡に建つ巴江神社に宝物として保管されてきました。孔門十哲像には、文化十三年（一八一六）から嘉永元年（一八四八）の年紀が記され、現存するものの一部はこの孔子像よりも早く完成されています。この孔子像完成以前は他の者の筆にかかる孔子像が、石碑を墨摺りした拓本のいずれかが存在したと思われる、この作品完成後も拓本の孔子像を使用していたとの、古老の伝承もあります。昭和三十年二月二日に他の遺品とともに、渡辺華山関係資料の一部として重要文化財に指定され、昭和五十三年三月二十四日に歴史資料に指定替えされました。

田原町博物館学芸員

鈴木利昌

# 華山史跡紹介

## 華山が見た田原(その二)

今回からは『客参録』に描かれた田原の風景を紹介します。

**【姫島】**(三月二日) 姫島は冊子見開き部分に描かれ、薄緑に着色がされ、樹木の表現も見られます。その樹影から松と思われませんが随分立派な松が生えていたようです。島の左端(方位は東)には岩場が表現されています。海面は、墨で点が打つてあるだけですが、「此日天宇晴朗四



「姫島」のスケッチ

顧無翳海水青席如」と記すような穏やかな海と太陽の光が感じられるのどかな様子が表現されています。

姫島の地勢についてもふれていきます。南は砂浜、北は険しい岩場と成岩類のカンラン岩、蛇紋岩で、笠山と同様に半島内でも独特の地質です。華山もこの地質に興味を示し、「鉄分の多い赤い土」、「黒から茶赤緑の色の石」、「赤い石は磁石のようだ」と記しています。また岩場については「寝床の如く、暮盤の如く」、「鬼の宴会後の机をひっくり返したよう」と形容しています。

**【笠山から見た大洲崎】**(四月十四日) このスケッチには今はなくなつた大洲崎を中心に対岸などを描いています。古写真と見比べてください。景色が変わっているのはもちろんですが、少し俯瞰が高い位置にあります。華山の描いたスケッチには山頂が描かれています。近世の真景図にはたびたび見られませんが、山水画を描くように頭の中で立体的に実景を

解析し、画面に反映させています。華山のスケッチ及び古写真には、大洲崎がみられます。スケッチには松林が描かれていますが写真には稚松のように感じられます。大洲崎は砂利採取後消滅し、その後埋め立てられました。その場所は現在のトヨタ自動車田原工場あたりになります。

笠山山頂には松が描かれています。現在の笠山には稚松があるのみで、この十年で松は枯れ、笹が一面を覆つようになりました。姫島及び笠山の植生について、有識者にうか



「笠山(笠山)上ヨリ見ル」



『渥美』(大正4年)より



笠山から大洲崎跡を見る (H12.9.2)

がったところ、基盤の性質上、土壌化の少なく栄養がなない地質のため、大きな木が育ちにくいのではないかと教えていただきました。したがって、一定のサイクルで植生の変化が訪れているのではと

推定されています。

研究会員 中神昌秀 増山禎之

注 笠山は田原町北端に位置する標高78・6mの小山。姫島は三河湾に浮かぶ渥美半島唯一の島。大洲崎はかつて三河湾に突出していた砂州。



龍泉寺 (熊谷市)

埼玉県熊谷市三ヶ尻

天保二年(一八三一)十一月八日、渡辺華山は、高木梧菴を伴い三宅家の家譜を調べるために三宅家発祥の地、ここ三ヶ尻(甄尻)を訪れ、龍泉寺に逗留した。およそ二十日間、日夜奔走して調査にあたり、翌月江戸に帰って客坐録をもとにして原稿を整理し、上書して天保三年正月二十一日三宅侯に上申したのが「訪甄録」である。



「訪甄録」序文のなかに、留まる



そぎんの額と  
住職 小久保隆吽氏

こと二十日と明記してあり、文中、龍泉寺の項目のなかに「仁王門は、今年今月十八日、近郷信徒のもの力を合わせ以て落成す。臣又結縁を以て、其藻井に画し、また双雁図二幅を寄蔵す」とあり、この日落成式に立ち会い、十九日の夜いろいろと聞いたことを書き記している。

写真は、この時、龍泉寺山門(仁王門)の天井に多くの門人などとともに描いた『松図』である。この格天井は二十四枚からなり、その内の

一枚がこの『松図』であり、縦、横とも四十センチ大の杉板を円で区切り、外側は金泥が塗つてある。内側の胡粉を塗つた上に筆力をこめて松を描いてある。本図は、現在山門より取り外して寺内に保存してある。

また、龍泉寺に残されている華山関係の書画はつぎのとおりである。

「訪甄録」(梧菴・如山筆)・双雁図・仁王門天井板松図(以上県文化財)・潮音・貞賢・素琴・壺中天・近仁・魚藻・廉恥等。華山先生が龍泉寺を訪れたことは、地元民はもちろんのこと、遠近の多くの人々がよく知つているところであり、西の田原、東の三ヶ尻といわれて尊崇しており、小中学校の応援歌の中にも「その名は華山渡辺の燃える如き熱血を滾らす力我にあり」と歌われている。また、多くの団体や人々が「華山と龍泉寺」についての話を聞きにこられるそうです。(住職小久保隆吽氏談)

龍泉寺は埼玉県熊谷市三ヶ尻三の七二二(電話〇四八・五三一・三四



熊谷市・龍泉寺

三二)、真言宗豊山派(本山は奈良県長谷寺)、開祖は小此木紀伊守(後裔在住)現在の住職小久保隆吽氏は第十六世である。

関越自動車道花園インターから熊谷方面へ約十キロの所にあり、一面は関東平野の平坦地であるが、寺のある所だけが孤立した狭山という標高八十二メートルの山にある。一度ぜひお出かけ下さい。

研究会長 渡辺巨祥

紀行文  
游相日記 (3)

(お銀の) 長子清吉(二十二歳)が厚木(相模国愛甲郡厚木村=神奈川県厚木市)まで馬を引いて行っていたが、やがて帰ってきた。たいへん太くがっちりとした男で、素朴なことはいうまでもない。やがて懐から路資をとり出して、みな与えようとしたが、いまだ路の程も遠く、また、はるばるここまで来たのに、厚木から浦賀(相模国三浦郡浦賀村=神奈川県横須賀市浦賀)までの用事もしないで帰るといのも本意ではないので、路資を二つにわけて、(その一つを)六つに割り、四つをその人に与え、二つはその父と清蔵に与えた。また、喜びも限りなかった。

そばがきを二碗食べた。梧庵は一椀でやめた。酒を三盞、軽く軟んだ。濁酒はのどを通らなかった。吸い物は、豆腐と卵で、味はよくなかった。一箸出してくれた梅干しはうまかった。栗餅をひとつ食べた。その人は、喜びのあまり、何かと工夫して、このようにもてなしてくれた。

幾右衛門(お銀の父)が来た。年七十八。頑丈な体の翁である。

『お銀は)又、行すへ、こし方の物がたりに、なみだ落る事折々なり。我が身の上を語りてはなき、都(江戸)の空を思ひてはなく。たゞ、けふといふけふは、仏とや云ん、神とや云ん、かゝる御人の、草の庵に御尋候はとて、むかしがたりに、時移りて、日西にかたぶく。かくあらんも農業のさまたげ也とて、行すえの事など、うけ引て(話を切り上げて)立ち出づ。』

長子清吉が、馬を引いて出てきて、お乗り下さいと言った。断つて徒歩で行く。ずた袋と笈とを馬につけてもらつて、村境まで、一家全員が出て送つてくれた。村の人々もびつくりして、みんな門に立つて見送る。また、武陵(秦代に乱世を避けた人たちが隠れ住んだという別天地)の真境をみる気持ちで、そぞろに思った。

そもそも、この小園(相模国高座郡小園村=神奈川県綾瀬市小園)というところは、戸数わずか二三軒(二三十軒の間違いか)に過ぎない。石高は二百石、(下総国佐倉藩主)堀田相模守(正睦)殿の領地である。土は赤黒、砂まじりであつて出来の悪い土地である。田は少なく、畑が多い。

早川(高座郡早川村=綾瀬市早川)もさびしい村である。佐倉(下総国印旛郡佐倉町=千葉県佐倉市)から、一年に一度、人別改めに来る。農民はなおのこと、寺社までがその滞在先へ行つてあ

いさつをする。また、これによつて、偵察をもすると聞いている。

【六十三頁、この頁に小園村の略図を描いている。「清蔵家」「幾右衛門家」「地藏堂」「早川といふ」などの書き込みもある。(前号に掲載)】

国府(高座郡国分村=海老名市国分)という所に出た。昔の国分寺の鐘があると聞いていたが、見つけることはできなかった(上の空間部分に、

お銀(中)・清蔵(左)の墓



「得鐘銘 搦本出後」とある。ここを出ると、見渡す限り広々として、目に見えるのはすべて稲田である。海老名(高座郡海老名村=海老名市)という。この田は三千石を収めている。前に雨降山を拝し、景色はいいことはない。堤の長さは十八丁(一丁=一町、約百九メートル)で、川原口村(高座郡河原口村=海老名市河原口)に至る。ここに、有鹿神社がある。相模十三座のひとつで、延喜式に載っている明神である。

『相模川をわたる。此川、大凡三・四丁もありぬらん。清流巴をなして下る。香魚(鮎)甚多。厚木に到。万年屋平兵衛が家を主とす。厚木の盛なる都(と)ことならず。家のつくりさまは、江戸にかはれども、女男の風俗かはる事なし。』

この夜、訪れてきた者は、斎藤鐘助、名は利鐘字は万鈞、号は昨非。書をもって生活のかてしている。子弟を集め、一郷の指導者である。年はわずかに三十。容貌はすぐれている。声がたいへん大きい。

唐沢蘭齋、名は孝順、武蔵国の二ノ宮(武蔵国多摩郡二宮村=東京都あきる野市二宮)の人である。姓氏録(『新撰姓氏録』)にいうところの加羅姓の子孫だという。医者を仕事とし、すぐる文字が読める。この土地にたいに字を知っている者がいない。ただ、この唐沢と斎藤氏だけである。

内田屋佐吉、これは、提灯というものをこしらえることを仕事としている。長唄とかいうものに優れており、富士田仙蔵という者に学んだという。目薬屋常蔵、これは三味線に優れており、この里に並ぶ者がない上手な人だという。

この人々が来て、酒席を設け、肴を並べて、夜が明けるまで、歌ったり舞ったりして、私を慰めてくれた。

客舎酔舞図



【六八・九頁、二頁にわたって、「客舎酔舞図」と題して九人の人物を描いている。その中には自画像もあり、「予酔臥」とある。他に、梧庵、斎藤鐘介、唐沢蘭齋、蘭齋娘、内田屋佐吉、目薬屋常蔵、萬年屋亭主、小園の清蔵が描かれている】

『厚木八愛甲郡二属ス。文祿、慶長ノ間(一五九二—一六一五年)、中郡ト称スルモノコレナリ。今、アイカウト呼トモ、昔ハアカ郡ト称セシを、今ナカト誤レルナルベシト。撫松齋藤利鐘ノ号。云ク。大中郡ト称スレバ、上下ヲ分ツコトモアリシヤ。』

戦国期、相模国は主に、東・中・西および三浦の四郡に分けて称された。中郡は、中世の淘綾・大住・愛甲の三郡にわたる地をいった。

厚木。東は相模川を境に、西は恩名(愛甲郡恩名村=厚木市恩名)、北は金田(愛甲郡金田村=厚木市金田)、南は岡田(大住郡岡田村=厚木市岡田)を境に、およそ縦二十町余り、横三十町ばかりである。烏山侯(下野国烏山藩大久保佐渡守忠保、栃木県)の別封(飛び領地)で、納めるところは一千八百石余りである。陣屋は天王宮(厚木神社)の傍らにある。年四回、役人が交代する。

烏山侯に領属するのは、用田、中野、岡田、厚木、半原、柵村、大島、片瀬、腰越、鎌倉、

厚木の渡し



山崎村、おおよそ一万石という。おおよそ村数三十六カ村。

政治は甚だ苛酷で、人々は皆、恨みと怒りを持っていて。最近、糖粃乾鰯（ぬか、しいな、ほしかなど乾燥肥料）の仲買人十軒を定め、運上金（営業税）を取り、また、用金（賦課金）を命じて、人々の肥沃な土地を奪い、一挙に二千両を出したのも、ただ厚木だけである。また、

厚木の盛んなことを知ることできる。

厚木の豪商、溝呂木彦右衛門（孫右衛門が正しい）、高部満

【七十二・三頁にかけて、唐沢蘭齋と告原錦波の短歌がそれぞれ自筆で書いてある】

『文車のちりも払らわず我れ八た』

浮世のわざに心ひかれて 王孝順

右唐沢蘭齋、為余書自詠一首。初、固

辞不示、以余索之切塗悪札。自云、以

書之工拙論我非知己也。

（右は、唐沢蘭齋が私のために書いた、自分の詠んだ一首である。初めは固辞して示さなかったが、私がこれをしきりに求めたので、下手な短冊を塗りつぶした。自ら言った。書の上手下手をもって自分の間違いを論ずるのは自分を知っているからである。）

左柘原宗次郎、号錦波、善詩書、学牧

弘齋。自云、愛襄陽之佚邊、為余書其

祖王阿句。

（左は、柘原宗次郎、錦波と号し、詩書を善くし、牧弘齋に学んだ。自ら言った。湖北省襄陽県に

生まれた唐の孟浩然のおおらかさを愛し、私の

ために祖父王阿（玉珂が正しい）の句を書くこと

『赤本は春のもの也呼子鳥

夏の月行方なきに戻りけり

木登りが下りて負けり辻角力

行年やとんじやくなしの渡し守

祖父王阿（玉珂が正しい）九十八、上の句

をしるす。 錦波

兵衛はみんな呉服商である。彼らは万を数えるほどの大金持ちである。相模川の渡船料も又少なからず、みな溝呂木へ収めるといふ。

烏山侯に領属するところの富豪の第一は、栗原村（高座郡栗原村＝座間市栗原）の大谷弥一で、おおよそ十八万両の富といわれている。また、これに次ぐ者は、用田村（高座郡用田村＝藤沢市用田）の伊東彦右衛門（孫右衛門の誤り）と一の宮（高座郡一の宮村＝寒川町一の宮）の日野屋新太郎である。

厚木の盛んな所以は、ただ相模川が船の道となっていて、旅客の達路となり、川は相模の須賀浦（大住郡須賀村＝平塚市須賀）や柳島（高座郡柳島村＝茅ヶ崎市柳島）にいたり、津久井丹沢の山々から炭や薪を運び出している。みんなこの地の豪商が買い取り、須賀へ出している。須賀からは海船によって都に達している。

塩と乾し鰯は、相模の海は言つに及ばず、総房諸州（上総・下総・安房・千葉）からの地へ来て売っている。また、これを信濃（長野県）、甲斐（山梨県）の山中に持って行く。それで、塩魚、炭薪が最も利益が上がる。このほか、海運の便によつて、布、綿、金、鉄から、以下諸物、常用の道具に至るまで、ひとつも欠けるものはない。このことは、運送の便利さによつてもたらされるものである。およそ、この土地を通る客の多くは、八王子（武蔵国多摩郡八王子村＝東京都八王子市）より八王子は、綿織物と絹織物を出すことが盛んである。は平塚（大住郡平塚宿＝平塚市）道で、江戸よりは大山（大住郡大山村＝伊勢原市大山）道、矢倉沢（相模国足柄上郡矢倉沢）、信濃の諏訪、甲斐国、荻野（愛甲郡荻野村＝厚木市荻野）の諸道もあり、故に宿屋も盛んに営まれている。酒肴の使も、いながらにして八種の珍味が手に入る。相模川の良い点は前にも言ったが、害になる点もまた多い。四・五十年前のこと（天明三年＝一七八三のことか）だが、雨が連日続き、洪水となった。田圃、人家の流出は数知れなかつたが、ただ前もって備えていたので溺れて死ぬ人はなかつた。文政の初めに、幕府は大いに治水工事に取り組み、新しい堤防を十里、その費用も莫大



相模川

で、一年にして完成した。その翌年、長雨の大水であったが、堤防があるので、地元の人々は安心していらした。しかし、新しい堤防が水の流れをますます激しくして、ますます勢いを増した。堤防はまだ固まっていなかつたので、すべて決壊してしまつた。大きなうねりが港に入り、人々の家では驚き悲しみ、あわてて右往左往して、溺れてなくなつた人は数知れずであつた。

田圃もまた凹地となつて荒野となつたところも多かつたといふ。

唐沢蘭齋が言つた。幕府の役人の人となりは、人徳を備えず、医術にひいていない医者が慈悲をもつてなすようなものだ。初め、幕府は役人を派遣して河を治めようとしたが、役人はやつて来て、市民から財貨や金銭をむさぼり、市民は使役に苦しんだ。堤を作つても固まらず、理由は、ただ人力を頼み、土石を排除して、岡を作るのみであつたからである。それ、河が満ちあふれたのは、川底を深く掘ることを怠っているからである。河が深くない時は、堤の力は水を支えることができなからである。ついに、かえつて大害をもたらすことになる。堤が決壊した後、また補築の話は寂として聞こえてこない。

幕府の役人で、土木の任にあたるものは、皆入札を行い、その価格の上下をもつて定めた。けだし、入札はみな価格の低いものを望むので、それゆえ、それ相当の価格ではなかつた。幕府の役人は、金およそ一千両としたが、実際に費やす費用は、金三百両にも満たないといわれた。請負人は、幕府の威を借りて村人を欺いて使い、その害は、一国に及んだ。（続）

各地の博物館を訪ねて  
「東京国立博物館」

東京都台東区上野公園13 9

〇三 三八二二 一一一一

<http://www.tnm.go.jp/>

交通 JR上野駅公園口

JR鶯谷駅から徒歩10分

営団地下鉄上野駅から徒歩15分

京成電鉄上野駅から徒歩15分

開館時間 午前9時30分～午後5時

4月から9月末までの毎週金曜日

は、午後8時まで夜間開館あり

休館日 月曜日（祝日・振替休日時

は翌日）、年末年始

東京国立博物館は、日本を中心に  
した東洋の美術・考古遺物を主な収  
藏品として、その件数は八九、〇〇  
〇件以上を数えます。また、歴史の  
上では、明治5年に旧湯島聖堂の大  
成殿で開催された日本初の博覧会を  
機に発足した「文部省博物館」を前



身としています。収藏品には国宝・  
重要文化財も数多く、日本を代表す  
る博物館です。

展示館で、日本の美術を紹介する  
本館（昭和13年開館・展示室23室）、  
東洋の美術と考古遺物を紹介する東  
洋館（昭和43年開館・展示室10室）  
は、おなじみですが、平成11年7月  
に法隆寺宝物館を10月には平成館が  
開館しました。平成館は、2階に特

別展専用の展示室（4室）と1階に  
日本の考古遺物を紹介する考古展示  
室のほか、寄贈品展示室、講堂、ガ  
イダンスルームなどがあります。ま  
た、明治末期の洋風建築を代表する  
建物として重要文化財指定の表慶館  
（大正天皇のご成婚記念として計画  
され、明治42年開館）や上野公園か  
らも見える旧因州池田屋敷表門を移  
築した黒門（重要文化財）などもあ  
ります。

展示には、平常陳列と呼ばれる分  
野別の通史展示と、テーマに基づい  
て構成される特集陳列があり、1  
2か月ごとの作品の入れ替えがあり  
ますが、常時二、五〇〇件ほどの作  
品を観覧することができます。もち  
ろん、年に数回の特別展や特別展観  
が催されます。渡辺華山作品の国宝  
『鷹見泉石像』、重要文化財『佐藤一  
斎像』も収蔵されています。

また、作品公開とは別に、美術に  
関連する図書・写真等の資料を収集  
し、研究者向けに公開しています。  
調査・研究事業として「MUSEU

M」（東京国立博物館美術誌）とい  
う機関紙や年刊の研究紀要も発刊し  
ています。これらの図書は本館地下  
1階のミュージアムショップで購入  
することができます。ショップは、  
平成2年に開設され、東京国立博物  
館の出版物や館収藏品をもとに「ア  
インした絵はがき、文房具、Tシャ  
ツなどのグッズ、書画の複製品や伝  
統的技法を用いた陶器や漆器なども  
あり、多種多様な販売品があります。

また、美術、考古、歴史関係の一般  
図書はもちろん全国の博物館・美術  
館の展覧会図録や研究図書を販売し  
ています。なかなか訪ねることがで  
きない館の出版物も手に取って見る  
ことができます。田原町博物館の図  
録も販売しています。

上野公園には、国立西洋美術館や  
国立科学博物館、東京都美術館もあ  
り、昨秋、東京芸術大学大学美術館  
も開館しました。十分な時間をかけ  
て訪ねてみることをお勧めします。  
田原町博物館学芸員

鈴木利昌

## 華山史学研究会

### 会員の一人言

研究会員 中神昌秀

佐藤昌介氏が講演の中で話され、

また杉浦明平氏もその著作に書いているように、私も最初から華山が特別好きであるとか、興味があつたという訳ではない。華山史学研究会が発足して一年位たつた頃であろうか、たまたま勧誘され、地元ゆかりの華山の事を少し勉強してみようかという軽い気持ちで研究会に入会した。その程度の動機であつたが、華山の日記を読み、また華山の絵画を見たりして、華山を知れば知る程、その魅力に引き込まれて行く不思議な人物であつた。

華山については、田原藩年寄役、画家、蘭学者として、多方面で業績を残している。しかし、誤解を恐れずに言うなら、華山研究の鍵は絵画にあり、華山のすべては絵画に集約されると言つても過言ではない。平成六年に出版された日比野秀男氏の

「渡辺華山 秘められた海防思想」と題された本を読んでますます確信を深めた。ただ、この点についての詳細な論述は専門の研究者に任せたいと思う。

華山の絵画の中で私が好きな作品は、四州真景図である。華山についてはやはり肖像画がすばらしく、鷹見泉石像、佐藤一斎像等の完成度の高さが光るが、なぜか四州真景に心がひかれる。何年か前に研究会で四州真景の足跡をたどる旅をしたが、ますます好きになつた。

最後に一つだけ言つておきたい事がある。華山の絵画は生活のためだけに描いたとの誤解が世間にはあるように思う。確かに、プロの画家として、絵画を売り、生活の糧としたことは間違いない。しかし華山は絵画が大好きであつた。華山自身も鈴木春山宛の書簡の中で「幼少より画を志すに死をもつてし、他事顧みず」と書いている。これ以外にも、書簡や日記の中に絵画が好きであつたことを証明する記述がいくつも見られる。

## 渡辺華山先生について

田原東部小学校

六年 鈴木竜也

渡辺華山先生について、ぼくはあまり知りませんでした。しかし、いろいろ調べていくと、華山先生のすばらしさがどんどんわかってきました。こんなにすごい人が田原にいたことを知つて、あらためて、驚きました。

ぼくがまず一番驚かされたことは、華山先生が田原藩のため、日本のために一生懸命働いたことです。その時に、自分のことは置いておいて、今、日本にとって何が必要かを考えていたことです。さらには、自分の命の危険もありながら、幕府を批判した、その心の強さには驚かされました。

そんなにすばらしい華山先生が、最後は切腹したことを知りました。きつと、華山先生が田原藩の重要な役職についたままであれば、その後

の世の中は変わっていたかも知れませんが、戦争などでたくさんの方が死ななくてすんだのではないかと思えます。だから、切腹させられたことは、本当に残念だと思えます。華山先生をねたんで、わなにはめた人たちは本当に馬鹿なことをしたと思えます。きつと、華山先生もくやしきつたんだらうなと思います。

次に驚いたことは、華山先生が絵の名人でもあつたことです。さまざまな新しい学問を勉強して、日本や田原藩のためにがんばつていた華山先生が、さらに絵の勉強もして、すばらしい絵を描くようになったことに驚きました。テレビで、華山先生の絵を見て、すごく上手だったことを覚えていきます。

このように、どんなことも努力して、自分のものにしていった華山先生は、田原の英雄だと思います。

ぼくも華山先生を見習つて、努力することを忘れず、これからがんばつていきたいと思えます。

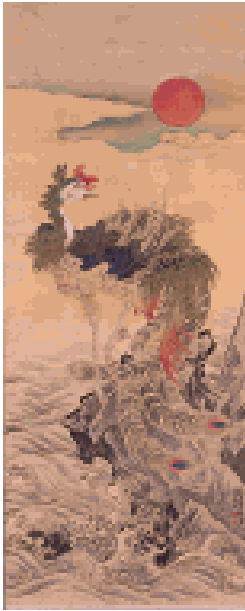
田原町博物館から  
平常展のご案内

九月二十六日(火)～十一月十二日(日)  
渡辺華山と椿椿山を中心とした特別展示室



渡辺華山筆 重美 壬午図稿

十月十四日(土)～一月八日(月)  
芝村義邦コレクシヨン  
浮世絵・絵日記・押花(企画展示室一・二)

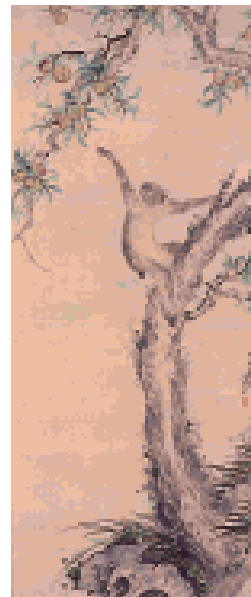


平井顯齋筆 旭日鳳凰図

十一月十四日(火)～十二月二十四日(日)  
渡辺華山とその周辺(特別展示室)

十二月二十六日(火)～二月十八日(日)  
渡辺華山とその周辺(特別展示室)

一月十日(水)～二月十二日(月)  
椿椿山・華谷・二山(企画展示室一・二)



野口幽谷筆 桃李山猿図

二月十四日(水)～三月十一日(日)  
農耕画家 渡辺杜月(企画展示室一)  
二月十七日(土)～三月十一日(日)  
四代のひな人形・天神(企画展示室一)

二月二十日(火)～四月十五日(日)  
渡辺華山・椿椿山とその弟子(特別展示室)

三月十三日(火)～四月十五日(日)  
田原城の歴史(企画展示室一・二)

観覧料 一般二〇〇円(一六〇円)  
小中生二〇〇円(八〇円)  
( )内は二十名以上の団体の料金  
毎週月曜日は休館  
十月十二日・十三日は臨時休館

一月二十七日(土)～二月十日(土) 十日(土)午後一時三十分  
博物館講座  
江戸時代の版本を読む  
講師：豊橋市美術博物館  
学芸員 和田 実氏  
定員 五〇名(先着順)  
会場 華山会館 集會室  
参加料 無料 申込制  
(一月五日～一月二十日までに)

田原町博物館(一三二・一七二〇)

華山会報第五号

平成二二年十月一日発行  
編集発行 財団法人華山会  
理事長 白井孝市  
事務局長 中神洋一

TEL 五三二・三三・一七  
FAX 五三二・三三・一七

編集・協力

田原町博物館  
華山・史学研究会

会長 渡辺百祥

林 和彦 尾川新一

山田哲夫 我部山正

林 哲志 小川金一

柴田雅芳 増山禎之

加藤克己 中神昌秀

仲井千恵

華山会報ご希望の方は華山会館・田原町博物館にお申し出下さい。  
次回発行予定二三年四月一日